

# 講演会要旨

人文研究所講演会

スタニスワフ・レム国際シンポジウム

時 間：2011年6月18日（土）14：30時-17：30時

会 場：神奈川大学横浜キャンパス1号館804教室

ポーランドの作家にして哲学者、スタニスワフ・レムについての最初の国際シンポジウムにおいては、講演が三つ行われた。

最初の講演は、レムの専門家として国際的に認められているピーター・スウィルスキ（ヘルシンキ先端研究所）が、「レムの手紙と精神」と題して英語で行った。スウィルスキは、レムやレムの家族との個人的な関係を詳しく報告し、自身の最新の研究プロジェクトについて報告した。レムの書簡や彼のエッセイの中でも最も重要なものに属する「挑発」の翻訳のみならず、批評的論文もいくつか収められている著書『レム論争』についても報告された。スウィルスキはさらに参加者を、クラカウで行われる学会を訪れるよう、また、レムについての新たな本を作る計画に参加するよう、誘った。

二番目の講演は、神戸大学のヴァレリー・グレチュコ「スタニスワフ・レム作品のロシア語訳における検閲の問題」であった。講演はロシア語で行われ、講演者の妻である神戸大学の増本浩子が日本語に逐次通訳した。文学作品の翻訳の過程や、そうした翻訳が異文化間のやりとりにおいて持つ意味から説き起こしつつ、グレチュコは、ソ連時代にスタニスワフ・レムが書いた、厳しい批判も含む文章のロシア語訳や、当時の政治的文化的背景を分析、これらの翻訳の検閲が及ぼした影響を説いた。

三つ目の講演は、東京大学の沼野充義が「スタニスワフ・レム、あるいはラディカルな相対主義者」との題で行った。沼野は、もともと日本語で行う予定であった講演を、参加者の顔ぶれに合わせて英語で行ってくれた。沼野は、レムの最も名高い長編小説『ソラリス』を、レムの文学者としての経歴における転回点として解釈した。それまでの、どちらかと言えば楽観的な普遍主義から、むしろ懐疑的な相対主義への転回が生じ、ソラリスの海は、究極の他者として、すなわち、人間理性の普遍性に対する謎めいた挑発としての役を演じている、というのである。このようなレムの視線への食い違いを見せたのが、ロシア人の映画監督アンドレイ・タルコフスキーによる、この小説の映画化である。タルコフスキーは、この地球外存在の実存の根に回帰しようとしたのであり、レムのように他者との対面を求めなかった、というのだ。

三つの講演に続いて、活発な議論が行われ、20世紀のヨーロッパの最も重要な作家・思想家であるレムについて、さらに共同研究を行うことで一致した。

（文責：ブッヘンベルゲル・ステファン）

開催日：2011年5月27日

会場：11-31

講演者：篠山淳子（附属学校カウンセラー・NPO 法人名あではで神奈川）

演題：「発達障害を持つ人の心に添う」

発達障害と言われるものは、主として三つに分類される：「学習障害」は、読み・書き・算数・運動機能のいずれかに困難のあるもの；「自閉症スペクトラム」として捉えられる「自閉症」「高機能自閉症」「アスペルガー障害」は、コミュニケーション・社会性に困難があり、興味の幅・想像力が限られ、ある種の感覚が過敏になっているもの；ADHD（注意欠陥多動性障害）は、不注意・多動性・衝動性が高いもの、である。

いずれも、親の育て方によって生じたものではなく、脳の何らかの特異性によるものと考えられている。

「自閉症」的な人には、曖昧なものを受け容れにくかったり、耳からの情報より視覚からの情報がよく入ったり、臨機応変に対応しにくかったり、言われたことを言葉どおりに理解したり、大きな音や人のざわめきが苦手だったりすることが多い。

このような障害を持つ人に対しては、①話されることをよく聴く、②短く簡潔な表現をする、③具体的な表現を用いる、④否定的な表現を使わない、⑤できるだけ視覚的に見てわかるように伝える、⑥今から行くことを予告する、⑦一度に複数のことを求めない、⑧答えを待つ時間を取る（10秒ルール）、などを心がけるとよい。

そのような障害を持つ人が、その人の人生を豊かに自分らしく生きるためには、家族の中で、また学校の教員や地域の人々に理解されることが大事である。そうすれば、自分自身を理解し、自分に備わっているものを受け容れ、それを最大限に生かして、困難を克服してゆくことができる。

（文責：下田節夫）

1. 開催日：2011年12月20日（火）
2. 会場：11号館25号室
3. 講演者：小西 優（防衛大学准教授）
4. 演題：コンディショニングと健康
5. 要旨：

アスレティックトレーナーという仕事の役割、その内容についてご講演頂いた。選手のスポーツ外傷・障害の予防からリハビリテーションまでのコンディショニングの一環を行う大切な役割であることの説明があった。スポーツ外傷の応急処置として知られている RICE（Rest, Icing, Compression, Elevation）において、日本では15分くらいの冷却が推奨されているが、その科学的根拠はないようである。アメリカでは長い場合、90分間くらい冷却するケースもあるようである。

小西氏はアメリカの大学院修士課程でアスレティックトレーニングを勉強された経験があり、日本とアメリカの制度や仕事内容等の違いについても説明して頂いた。